

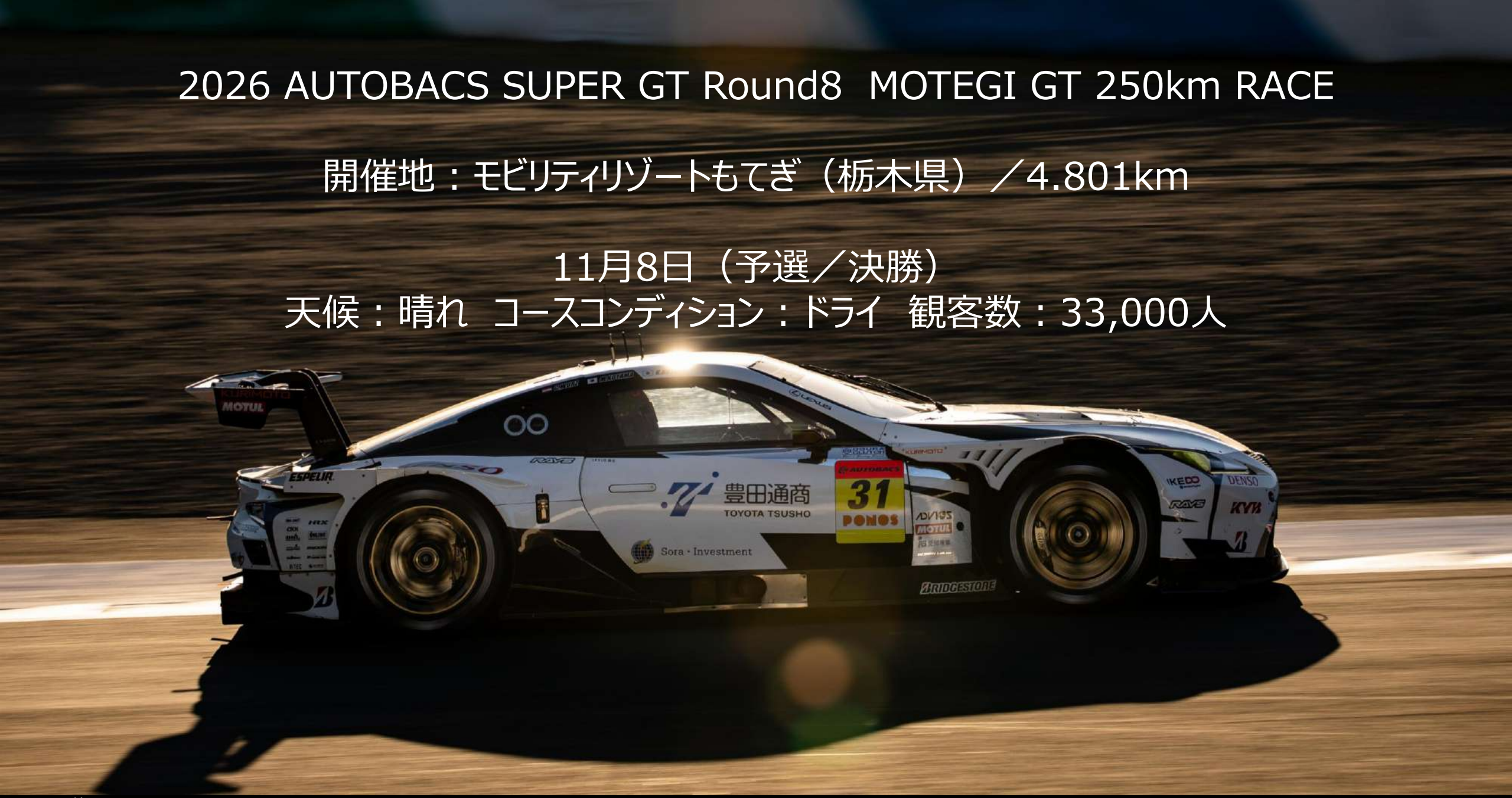
2026 AUTOBACS SUPER GT Round8
MOTEGI GT 250km RACE

apr LC500 h GT

2026 AUTOBACS SUPER GT Round8　MOTEGI GT 250km RACE

開催地：モビリティリゾートもてぎ（栃木県）／4.801km

11月8日（予選／決勝）
天候：晴れ　コースコンディション：ドライ　観客数：33,000人



apr
Racing Constructor

悔しさ残る2連戦、最後は1ポイントを手に来季へ

モビリティリゾートもてぎラウンドは、2027年以降に延期されたセパン大会の振り替えとして土曜日に第3戦を実施。日曜日には、2026シーズンの最終戦となる第8戦が行われる。

31号車 apr LC500h GTは、前日の第3戦決勝のクラッシュで左リヤサスペンションを損傷した。ホイールへの衝撃が強く、アップライトやアームやダンパーに加え、ブレーキキャリパーやドライブシャフトまで交換が必要になった。さらに、僚車の30号車 apr GR86 GTも第3戦でのクラッシュによりエンジンを載せ替えることになり、2台のメカニックが協力して修復作業に当たった。すべての作業を終えたのは、深夜3時だった。

2連戦という変則開催で、ただでさえ負担の大きいメカニックに、さらなる重荷を強いる結果となった。その思いに応えるためにも、31号車は2026シーズンの最終戦を好結果で締めくくるべく、最後の一周まで諦めずに戦う。

公式予選　11月8日（日）
8位　9:45～10:05

第8戦も午前に20分間の計時予選、午後に250kmの決勝を行うワンデー開催。第3戦とは別大会の扱いとなり、予選のドライバーを入れ替えることも可能だが、31号車はここでも小高にアタックを託した。

予選開始時の気温は15℃、路面温度は20℃。気温は前日と変わらず、路面温度は2℃上がったコンディションだ。小高は前日同様、終盤のトラックエボリューションを見越して、残り10分でアタックに向かった。

小高は計測4周目までを使ってタイヤを入念に温めていく。そして5周目にアタックし、前日の予選タイムを上回る1分45秒604をマークしたが、順位は8番手にとどまった。





小高一斗選手

「前日のクラッシュで左リヤの足まわりを総交換して、そこから走り込めなかった影響もあって細かなバランスが本来の状態とは異なっていました。好調時のバランスに近い状態には戻してもらえたと思うのですが、いつもとはフィーリングが何故か違いましたね。微妙な左右差がありました。万全な状態でアタックできなかったですが、間に合わせてくれただけで今は満足です」



小山美姫選手

「まずは車両を修復してくれたメカニックのみなさんに感謝いたします。予選はセッティングを合わせ込めていなかったようですが、決勝では追い上げていきたいです」



金曽裕人監督

「今回は予選用のセットアップを忘れずに入れましたが、小高選手からのサスペンションの動きに対しフィーリングはあまり良いものではありませんでした。交換したダンパーを本来であれば実走行にてセッティングを微調整する必要があるのですが、練習走行なしでの予選であり、残念ながら対応できませんでした。でも8番手からなので昨日優勝の96号車と同じスペックのブリヂストンですし、決勝の巻き返しに期待です」

決勝レース（50周）／15位　11月8日（日）14:07～15:42

フォーメーションラップが開始された14時のコンディションは、気温17℃、路面温度23℃。スタートドライバーは小山だ。

小山はスタート直後の1コーナーでイン側にポジションを取るが、前が詰まった状態で、アウト側からライバルに先行を許してしまう。その後はサイド・バイ・サイドのバトルもありながら、31号車はタイヤ無交換の作戦のため、タイヤを労りつつ無理をしないペースで周回を重ねた。

16周目からは、GT300クラスでピットインする車両が出始める。小山は12番手を走行する17周目でピットに向かい、給油して小高に交代。タイヤは無交換だ。ライバルチームのルーティンピットが落ち着いてきたときの順位は16番手。小高はそこから徐々にポジションを上げていき、31周目には13番手に浮上した。

ところが、39周目にパワステトラブルが発生。小高はホームストレートのレースラインではないピット側にクルマを停め、電源をリセットしてパワステを復帰させる。再走は果たしたものの、この間に18番手まで後退した。それでも小高はそこから追い上げ、46周目に入賞圏内の15番手までポジションを戻してフィニッシュした。

トラブルで一時は入賞圏外に落ちたが、31号車は2026シーズンの最終戦でポイントを獲得。今季は開幕から2戦連続で表彰台に立ち、タイトルも見据えた戦いを続けてきた。もてぎ2連戦は悔しい結果となったものの、チャンピオンを狙えるポテンシャルがあることを証明できたシーズンだった。







小高一斗選手

「昨日レースを走れていなかったことで走行データがなく、タイヤの内圧が想定より高くなりすぎてしまいました。FCYが導入されてタイヤ温度が冷えたタイミングではラップタイムが1秒も縮まったし、車両バランス自体は悪くなかったと思います。今シーズンは序盤の2戦で表彰台を獲得して好調な立ち上がりでしたが、サクセスウェイトによる重量ハンデに加えて給油時間が長くなると、結果を残せないレースが続いてしまいました。序盤の好調を維持し続けるための力が、自分にはまだ足りていませんでした」



小山美姫選手

「昨日のこともあったので、今回は絶対に完走したいと思って臨みました。でも、タイヤのグリップはずっと低い状態で、ブレーキングで対抗できない状況が続き、抜かれる場面もありました。トラブルもあって一時は入賞圏外まで落ちてしまいましたが、今年最後のレースでポイントを獲得できたのは良かったと思います。今年はフル参戦2年目で、良いときも悪いときもありましたが、表彰台に立つこともできて、すごく良い経験をさせていただきました。チーム、スポンサー、ファンのみなさんに感謝したいです」



金曽裕人監督

「タイヤは無交換でもライフ的には問題なかったのですが、前日の走行データがなく、タイヤの内圧やセットアップも最適とは言えない状態でした。昨日チャンピオンシップの可能性が消滅していたため、完走してデータを取ることを優先しました。パワステのトラブルは金曜日の専有走行でも起きていて、念のためにグリッドでECUを交換したのですが、ハードウェアの問題ではなく、制御プログラムに原因がありそうです。その状況でも、最後は小高選手がプッシュしてくれて、1ポイントを獲得することができました。今季はタイトルを争いながらも、シーズン終盤に向けて競争力が先細りになってしまいました。コンペティティブなチームとして成立するために、来季に向けては総合的なレベルアップを図りたいと思います。良い時も悪い時も、支えてくださった沢山の皆様、2026年度、ありがとうございました」

APR RACING

PARTNERS

豊田通商 TOYOTA TSUSHO
日本化薬
DENSO
COROLLA MIE NETZ NOVEL MIE
Sora・Investment
Shinko
Suzuka Corolla Mie
Matsusaka Corolla Mie
Yokkaichi 伊勢
KYB
KURIMOTO
住友電装
OBERON
DENSO
TAC
IKEDO archetype
愛知産業
SHINNIHON
Castrol
STB SPORTS
損保ジャパン
東京海上日動
ミエスコム
モビリティパーツ TOYOTA
OGURA CLUTCH
ADVICS
MOTUL
アイチオート用品
CPC
鈴与レンタカー
LEXUS
TGR-DC
TRD
BRIDGESTONE
RAYS
TOYOTA
TRD
YOKOHAMA

